

# 小神明遺跡群III

—小神明地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財  
発掘調査報告書—

谷 向 遺 跡

1984

前橋市教育委員会







## 序 文

本市芳賀地区は、芳賀郷という平安時代の「倭名類聚抄」に名をとどめる地であり、各時代の遺跡の存在からも、古くから人の生活が営まれた地であることがわかります。

この地での調査は、古墳の調査の他、昭和48年から始まった芳賀北部団地遺跡から実際的には開始されているものです。

その後、芳賀西部・東部と続き、奈良三彩小壺を出土した桧峯遺跡の調査をへて、端氣・小神明地区の土地改良事業に伴う発掘調査へと続き、この地の歴史をひもとく貴重な成果を数多く得、報告書として市民のみなさんにお知らせすることができました。

本報告書は、昭和59年度小神明地区土地改良事業に伴うもので、今年度で三年目であり道水路部分について発掘調査を実施したものです。

住居跡は検出されませんでしたが、井戸など、先人の生活の跡を検出し、歴史上の資料を数多く得ることができました。

この報告書が、この地の歴史を明らかにし、地元関係者や歴史を学ぶ人々の資料として、埋蔵文化財に対する理解と关心を深めるために役立つことを希望いたします。

最後に、発掘調査にたずさわった担当者、作業員の方々の御苦労をねぎらうと共に、この調査に御指導、御助言、御協力いただいた地元土地改良区の役員、土地改良連合会、地元の方々に深く感謝するものです。

昭和60年3月15日

前橋市教育委員会

教育長 職務代理者

教育次長 奈良三郎



## 例　　言

1. 本書は、昭和59年度団体営小神明土地改良事業に伴う、小神明遺跡群III谷向遺跡の発掘調査報告書である。略称は59C—3である。
2. 小神明遺跡群IIIは、以下の土地に所在し、遺構の検出状況から、谷向遺跡と名づけた。

前橋市小神明町大字中程460他 1筆  
ノリ 大字宮西466他 9筆  
ノリ 大字谷向207他15筆
3. 調査面積は3,126m<sup>2</sup>である。
4. この発掘調査は、土地改良事業により遺跡が直接破壊を受ける部分について、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、小神明土地改良区の委託を受けるとともに、前橋市教育委員会が、昭和59年度文化財国庫補助金、県費補助金、市費により実施したものである。
5. 発掘作業は、昭和59年7月5日から9月14日まで実施した。整理作業は9月17日より11月1日までと、昭和60年1月5日から3月30日まで行なった。
6. 担当者は、唐澤保之、桑原昭、井野修二である。事務局は、福田紀雄、中野和夫、町田信之である。本書の発掘写真は担当者、本文執筆は以下の通り、編集は井野が行なった。

IV 土層と地形 唐澤保之  
その他の 井野修二

7. 遺物の実測、製図は新保一美が行なった。
8. 本遺跡の資料は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。
9. 作業員氏名（順不同）

鈴木八重子、平林百合子、松村ふさ、平林ふさ、五十嵐くま、鈴木孝子、塩野操、角田もと江、佐藤龍家、古松英太郎、中島幸重郎、平林要、大沢はつ、平林タカ、中島つる、平林チヨ子、横堀ます、佐藤里恵、野町昌弘、神野信、新保一美、齊藤守弘、天田玄市、亀井弘美、諸田陽子
10. 発掘及び遺物整理においては、次の諸氏から御指導、御助言をいただいた。心より感謝を表する次第である。（敬称略）

井上唯雄、上原啓己、小林敏夫、横沢克明、柿沼恵介、右島和夫、鹿田雄三、西田健、小神明土地改良区役員諸氏、土地改良区連合会、土地改良課、東京工業大学製鉄研究会、大江正行、加部二生、長谷部楽爾

## 凡　　例

- 各遺構の縮尺は $1/60$ を基本としている。トレンチ平面図は $1/300$ である。
- 各遺物の実測図は $1/4$ である。
- 遺構平面、断面におけるスクリーントーンは、以下のように使用した。

地 山 208	地 土 112	磚 91	粘り土 704	白色埴土 22
盛り土 81	表 土 413	磚 壁 426	A, B, C, FA 112	炭化物 320

- 水系レベルは、原則として各遺構ごとに統一した。
- 図版中の方位はすべて真北である。グリッドは、N-0°30'47"Eである。

## 本 文 目 次

序　　文 .....前橋市教育委員会職務代理者

教育次長 奈良三郎

例　　言

凡　　例

本文目次

I 発掘調査の経緯	1
II 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
III 遺 跡 の 概 要	3
IV 土 層 と 地 形	4
V 発見された遺構と遺物	
1 トレンチ	6
A トレンチ	8
2 トレンチ	9
3 トレンチ	11
4 トレンチ	12
C トレンチ	15
5 トレンチ	18
D トレンチ	26
VI ま　　と　　め	29

## I 発掘調査の経緯

小神明地区では、昭和57年度から土地改良事業が実施されている。それに伴い、埋蔵文化財の発掘調査が実施され、本報告は、その3年目にあたっている。

昭和59年度の調査に至る経過は、以下の通りである。

昭和59年5月16日 昭和59年度土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査打合せ会議が開かれ、今年度の事業実施地区と発掘調査地区が決まる。

農作業の関係から、麥刈り取り後となる。

6月21日 現地打ち合わせを、土地改良区、土地改良連合会、土地改良課を行い調査地区を確認する。

6月29日 土地改良区から発掘調査依頼がくる

7月5日 ひっこし、諸準備、調査区設定

7月9日 重機による掘削開始

7月23日 重機による掘削終了

7月25日 井上唯雄氏、吉岡村教委来訪

8月16日 西田健氏来訪

8月21日 横沢克明、柿沼恵介、右島和夫氏来訪

8月30日 鹿田雄三氏来訪

9月14日 発掘作業終了

9月17日 整理作業開始

11月1日 整理作業中断

1月5日 整理作業再開

3月30日 整理作業終了、報告書刊行



写真1 作業風景

測量基点については、水準は「小神明土地改良事業現況平面図4」遺跡北のBM1の133.117mより係員によって移動した。国家座標は、昨年度大明神遺跡のA-2地点を50-50地点としてグリッドを設定したため、以下の通りである。(グリッド設定図参照)

50-50(A-2) (X+45.849444, Y-65.993680)

尚、真北との偏差は、N-0°30'47"-Eである。

国家座標設定並びに測量は株式会社測設に委託した。

## II 遺跡の位置と周辺の遺跡



図2 遺跡の位置と周辺の遺跡

前橋市の中心部から赤城山に向かうと、平らな水田の広がる土地が途切れ、かけになっているところにあたる。ここは、旧利根川が流れ、削りとられたかけである。かけの上は、赤城山の噴出物による台地で、数多くの河川により舌状台地が形づくられているところである。

本遺跡は、旧利根川より北へ500mほどのぼった芳賀西部工業団地の西、標高120mほどのところにある。昨年度の大明神遺跡の北から西に隣接している遺跡である。周囲には、縄文時代から、古墳、奈良平安時代をへて、戦国、江戸時代まで続く遺跡が密集している。

本遺跡との関連でいえば、隣接の大明神遺跡では、古墳時代の住居跡2、河川跡1、芳賀西部工業団地遺跡では、縄文前期の住居7、古墳31が検出されている。また57、58年の小神明遺跡群では縄文、古墳、奈良平安の住居32軒、掘立柱建物跡2、環濠1、端気遺跡群で、縄文住居2、古墳時代住居17、方形周溝墓2、石敷造構2、環濠1を検出している。

遺跡の現状は、中央を西谷あるいは西川とよばれる河川が北から南へながれ、東は水田、西は桑畠になっていた。

### III 遺跡の概要



図3 遺跡全体図及びグリッド設定図

調査面積3126m<sup>2</sup>、東から南北方向のトレンチには算用数字、東西方向のトレンチにはアルファベットをつけた。Bトレンチは、現状道路と水路があり調査できなかった。

1トレンチ ピット20基 2トレンチ 河川跡2条 溝2条 4トレンチ 土坑2基 性格不明遺構2 鉄分凝縮2地点 5トレンチ ピット15基 井戸1基 土坑5基 性格不明遺構5  
集石遺構1 鉄分凝縮3地点 Aトレンチ 検出遺構なし Bトレンチ 調査できず Cトレンチ ピット12基 土坑2基 性格不明遺構1 Dトレンチ 溝1条 土坑1基 性格不明遺構1  
を検出している。

グリッドは、昨年度大明神遺跡A-2地点を50-50地点として、グリッドを設定、偏差は真北に対し、N-0°30'47"-Eである。図版中の方位はすべて真北である。

## IV 土層と地形

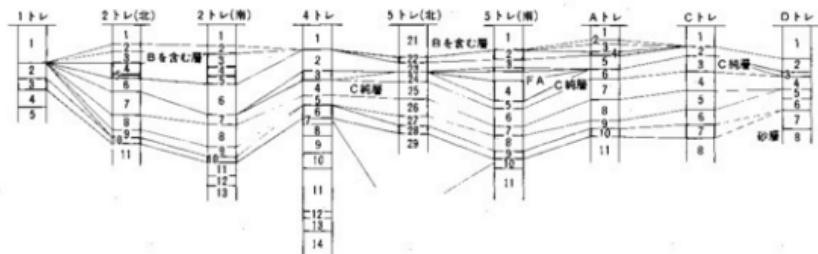


図4 標準土層対照図

本遺跡の調査は、土地改良事業を原因とするため、その性格上調査区域が広範囲にわたっている。したがって、各調査地点で大きな土層変化が予想されるため、各地区のトレンチごとに標準土層を設定し、後に遺跡全体の土層を照合することにした(挿図5)。具体的な土層説明は、各トレンチごとに後述するが、本調査地区的土層及び造構との関係は、下表のようにまとめられる。

分類	特徴	各トレンチの土層との照合								左記土層を覆土とする造構	
		1トレ	2(北)	2(南)	4トレ	5(北)	5(南)	Aトレ	Cトレ	Dトレ	
A	耕作土	1 層	1~3 層	1~2 層	1 层	21 層	1 層	1~3 層	1 層	1 層	1トレ P <sub>1</sub> ~P <sub>30</sub> , 2トレ W <sub>1</sub> Cトレ P <sub>1</sub> ~P <sub>12</sub>
B	浅間山B軽石多量含有		4~5 層	3~5 層		22 層	2 層	4 层			5トレ I <sub>1</sub> , 同 P <sub>11</sub>
C	B軽石隕下前の黒褐色土		6 層	6 層	2 层	23 层	3 层	5 层	2 层	2 层	5トレ P <sub>1</sub> ~P <sub>12</sub> 同 P <sub>14</sub> ~P <sub>17</sub>
D	F・A純層						12 層				
E	浅間山C軽石多量含有					13 层					2トレ R <sub>1</sub> , R <sub>2</sub> 同 W <sub>2</sub>
F	浅間山C軽石純層				3 层		4 层			3 层	
G	粘質の強い黒褐色土	2 层	7~9 層	7~9 層	4~5 層	24~27 層	5~8 層	6~9 層	3~6 層	4~6 層	各トレンチのD・X、5トレ S・X
H	河川堆積砂層	3 层	10 层	10 层	6 层	28 层	9 层	10 层	7 层		
I	シルト層	4~5 層	11 层	11~13 層	7~14 層	29 层	10~11 層	11 层	8 层	7~9 層	

上表及び挿図6東西地層断面の観察から、本遺跡地はロームがなく地山を水成堆積とするため、谷地状地形と推定される。その後、平安時代ごろまでは2トレンチ付近が比較的低く、上表分類Eの時代には、ここに自然小河川が南北に流れている。本遺跡地付近は、現在に至るまで周囲より若干低く、水はけも悪いため、人の住んだ積極的な痕跡は戸井1基のみであった。

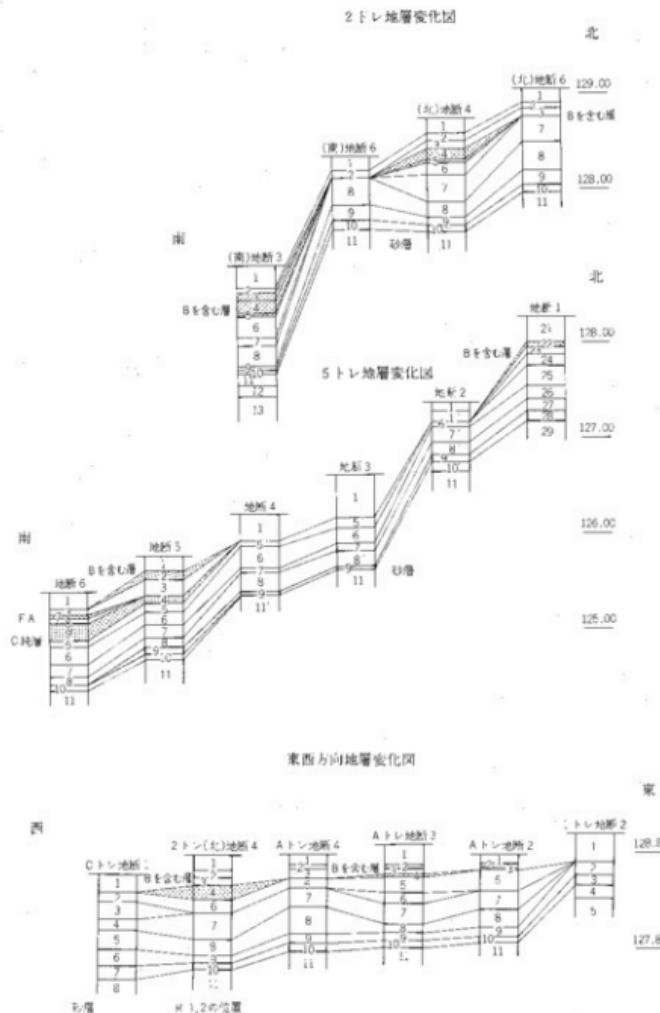


図 5 地形と土層対象図

## V 発見された遺構と遺物

### 1 トレンチ



写真2 1トレンチ（北から）

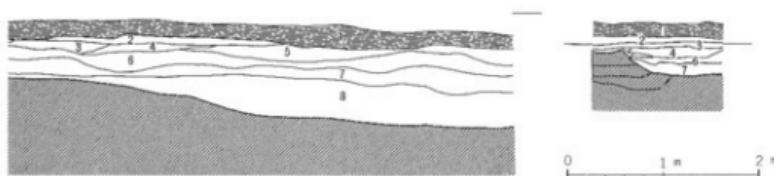
1トレンチは遺跡東端で現状の小河川に沿った道路予定地部分である。

ここは約20年前小規模な土地改良が行われたところで、河川についても、削平、埋土による流路変更があり、水田面についても、削平がなされていた。

検出した遺構は、ピットが20基である。

いずれも、地表からは浅い面で検出されている。土層並びに形状から考えて、新しい木の根の跡等と考えられるものである。

トレンチ中央に地山の段が検出されたが、これは地層の状態から考えると、土地改良による削平のあとと見られるものである。



1,7.5YR%	黒褐	鉄分混在を全体に含み外見は茶色味が強い。やや粘性有りしまり有
2,7.5YR%	黒褐	Cを含む黑色ブロック30%黑色土に近い色細砂しまり強粘性有り
3,10YR%	黒褐	砂質が強い、浅間系の軽石を含む。やや固くしまる
4,10YR%	暗褐	黄褐色土ブロック(5%大) 2%含む。しまり有
5,10YR%	暗褐	4層に近いが混入10%で全体に黄色味が強い。粗砂。しまり有
6,10YR%	暗褐	浅間系の軽石を含む。しまり強。粗砂。粘性有り
7,10YR%	黒褐	全体に砂質。黄色土ブロック(5%~10%) 2%含む。粘性。粗砂。しまり有
8,10YR%	黒褐	粘性有。粗砂。しまり有

図6 1トレンチ上層図

尚、トレンチ南端は、東隣の小河川の旧水路であり、深くえぐられていた。

地山まで覆土は7層を数えるが、すべて耕作土であり、地山との面を見ると一度削平され、盛られた土である。地山は黄褐色土とシルト主体の土であり、地表から30~50cmほどの深さである。

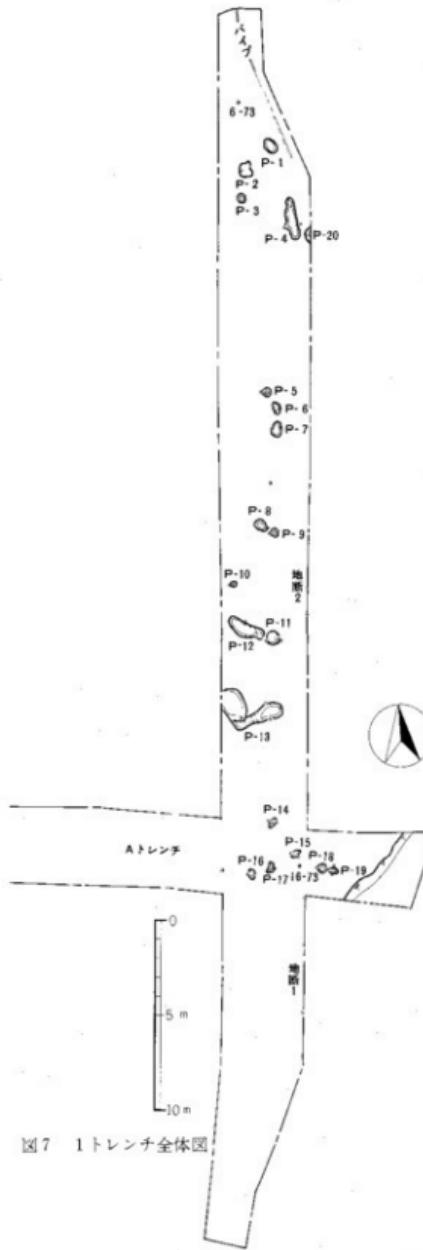
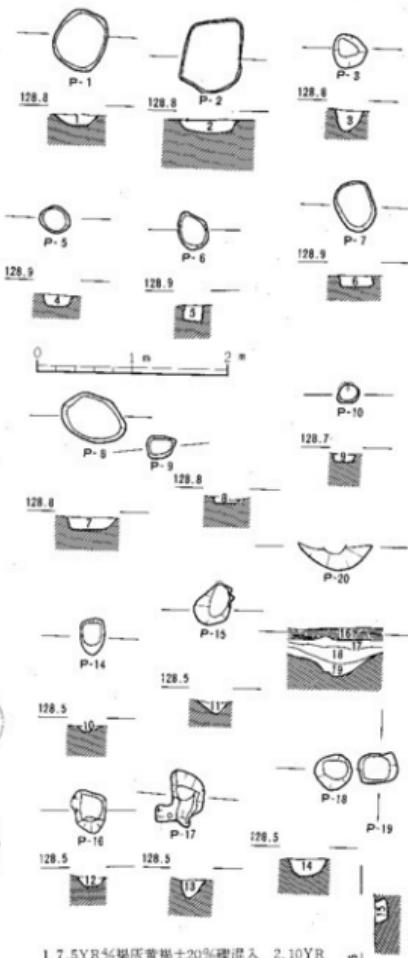


図7 1トレンチ全体図



1, 7.5YR%褐灰黄褐色土20%礫混入 2, 10YR  
13%黑褐色小砂砾石混入 3, 7.5YR%褐黃褐色  
褐色土15% 4, 2.5YR%黃灰褐色土15% 5, 同上  
混入30% 6, 同上混入25% 7, 7.5YR%褐黃褐色  
土20% 8, 7.5YR%褐黃褐色土30% 9, 7.5YR%黑褐色  
砂質 10, 10YR%黑褐色砂質 11, 10YR%黑褐色砂質黃褐色土  
20% 12, 10YR%黑褐色砂質黃褐色土60% 13, 10YR%黑  
褐色砂質黃褐色土15% 14, 10YR%黑褐色砂質黃褐色土40% 15,  
10YR%黑褐色砂質土10%砂質 16, 10YR%に赤褐色  
耕作土 17, 2.5YR%赤褐色分離縮 18, 10YR%に赤  
褐色しまり強 19, 7.5YR%暗褐色土15%

図8 1トレンチビット

## A トレンチ



写真3 A トレンチ (東から)

A トレンチは、遺跡東北部を東西に通るトレンチで道路予定部分である。

遺構は、全く検出されなかった。

土層は11層を数え1～3層は耕作土である。現状の水田として使用されたものである。

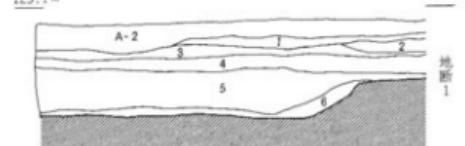
第4層は、Bスコリアと見られ、部分的には、純層と見られる土である。1～3層にもB軽石の混入が見られる。

そのため、第4層下にB水田の存在を予定して地断を調べてみたが、ところどころ波状になっているものの、畔の跡も検出できず、又これに伴う鉄分凝縮も見られないことなどから、水田は存在しないと考えられた。

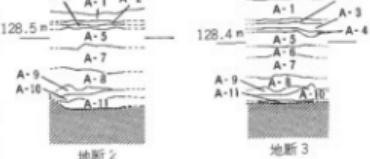
地下水位は高く、A トレンチを掘削した7月には、水がトレンチ内にたまり、調査終了近くになるまでひくことがなかった。

A 1, 10YR % 耕作土 A-  
2, A-1層の黒い層 A-3,  
7.5YR % 層の鉄分化で固  
い A-4, 10YR % B 主体  
層 A-5, 10YR % C 主体  
層 A-6, 10YR % 混入な  
し A-7, 10YR % A-8,  
10YR % 7層より黄灰色多  
い A-9, 10YR % 粘性強、  
しまり有 A-10, 10YR %  
砂多粘性強 A-11, 2.5Y  
弱シルト主体  
1, 10YR % C 含黑色上ブロ  
ック30%しまり強 2, 10Y  
R % 3, 10YR % 砂質 4.  
YR % 砂質 5, 10YR % 砂  
質 6, 10YR % 地山の土混  
入

129.1m



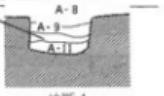
128.5m



128.4m



128.1m



128.4m

A1～A3層

A5～A7層

地断5

図9 A トレンチ土層図

## 2トレンチ

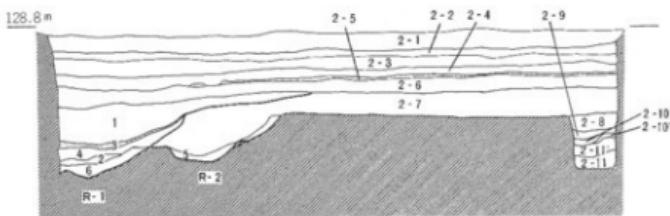


写真4 2トレンチ（北から）

2トレンチは、遺跡中央を南北に通るトレンチで道路及び用水路部分を掘削したものである。

昨年度の大明神遺跡で検出された河川跡がトレンチ南端で出、トレンチ北にも検出されている。この1号河川と重なる形で、1号より古い2号河川が検出されている。1号河川跡は、土層中央下にFA層があることや出土遺物に石田川期のものがあることなどから5世紀代のものと考えられる。

2号河川からは、繩文土器が出土していること、1号河川に切られていることなどから、1号より古ないと判定した。他に溝2条を検出、溝1は近世、溝2は1号河川にそそぐものである。



1.10YR%黒褐C、Fを含むしまり強鉄分凝縮15% 2.7.5YR%黒2~10層を10%含む 3.10YR%にぼい黄褐FA層 4.7.5YR%黒C含む粘性しまり強 5.7.5YR%黒褐砂粒多C含むしまり有 6.10YR%黒褐1~5%の砂理主体しまり弱 2-1, 10YR%黒褐粗砂 2-2, 7.5YR%黒しまり強鉄分凝縮多い 2-3, 7.5YR%黒褐粗砂鉄分凝縮10% 2-4, 7.5YR%黒褐B多し 2-5, 10YR%黒褐B主体層 2-6, 10YR%黒CとFを含む 2-7, 7.5YR%黒粘性しまり強細砂混入なし 2-8, 7.5YR%暗褐2-4に近い 2-9, 10YR%黄褐地は灰褐色に近いが黄褐の混入多い粘性しまり強 2-10, 7.5YR%褐粗砂質しまり有り 2-11, 7.5YR%褐2-10層より鉄分の酸化あり 2-11, 10YR%褐灰シルト粘性しまり強鉄分凝縮5% 2-11, 2-11層より酸化が進み固い。

図10 2トレンチ土層図

この土層は、2トレンチ中央の現有道路を利用してとったものである。西側に1号河川と2号河川が重なって検出された。2号河川はレベル的には1号河川の上だが、覆土が1号河川によって切られていることからも、2号河川の方が古い。3層はFAで、昨年度群大の新井房夫先生に確認していただいたものである。遺構検出面は2-8層である。2-1~2-3層は表土で耕作に使用された土であり、2-4、2-5層はB輕石を含む土で、ここでもB水田の存在を予想し、調査を進めたが、畔のあとやその下での鉄分凝縮もなく、水田の存在は確認できなかった。

1号・2号 河川跡



写真5 2トレ(北) 北から



写真7 2トレ(南) 北から



写真6 2トレ(北) 南から



写真8 2トレ(南) 南から

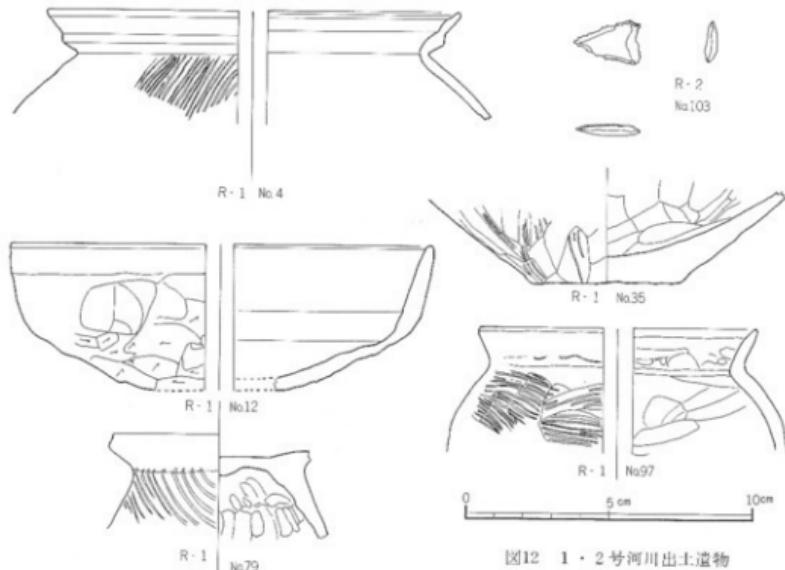


図12 1・2号河川出土遺物

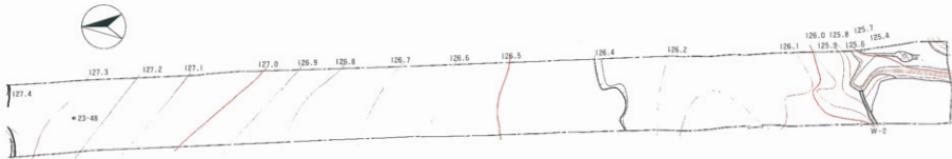
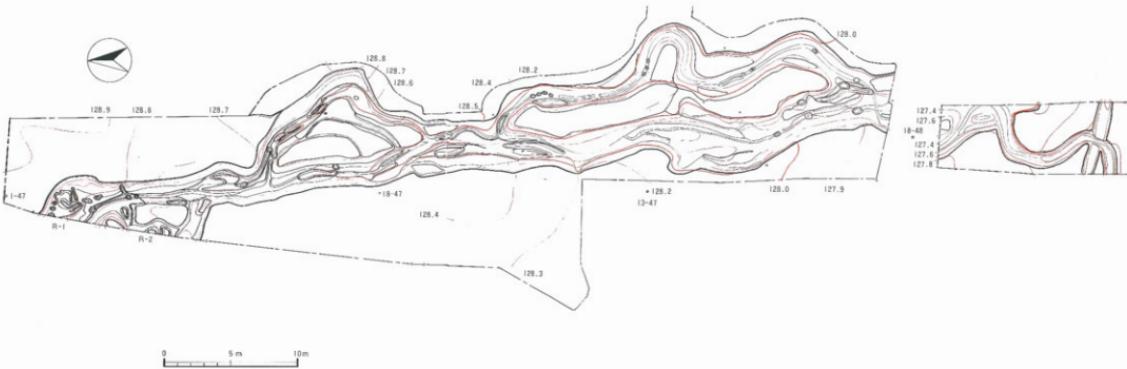
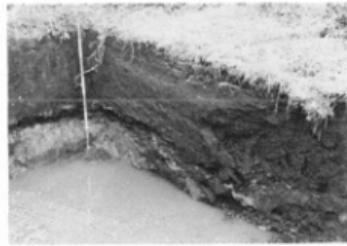


図11 2トレンチ全体図

### 3 トレンチ



写真9 3トレンチ現状（北から）



3トレンチは、遺跡中央の、地元では谷あるいは谷とよばれる部分を通る用水路予定部分である。

ここは、客土して高さを上げたところに用水路を作る予定地であったが、地元の古老が、ここは昔、女堀といつて人が掘ったものだという話から、掘り下げを行ったものである。

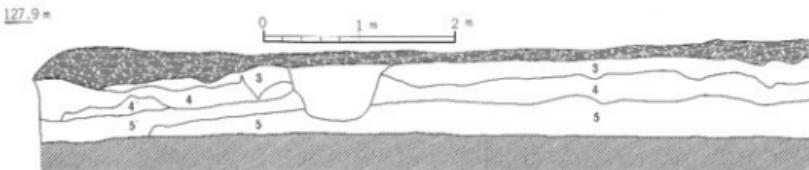
小トレンチを3ヶ所設定した。2ヶ所は谷に直交し谷の変化点にあたるところ、1ヶ所は谷東の畑で、土盛りの存在を調査した。

谷の小トレンチは、水をふくみしまりがないため、重機で掘削したすぐ後からくずれ、実測はできなかつたが、土層の様子や壁の様子、疊層、砂層の厚さから、ここは自然河川部分と判断された。

谷東の畑の小トレンチからも、堀を掘った際の土盛の痕跡が検出されず、土盛りはなかったと考えられ、自然河川と思われる。

この河川の北には不自然に曲った流路が存在する他この谷地のすぐ北も非常に流路が細くなっているなどこの流れすべてが自然河川とするには疑問が残るものである。

(左中)写真10 3トレ小トレ1 (左下)写真11 3トレ小トレ2



1, 10YR 5% 黒褐色砂しまりやや弱耕作土 2, 10YR 5% 黄褐色シルト質多量の砂粒と若干の小礫(5%大)を混入する。しまり有り 3, 10YR 5% に近い黄褐色シルト質2層に近いが砂質がやや強い。しまり有り。5%大の鉄分凝縮ブロック7%混入 4, 10YR 5% に近い黄褐色シルト質多量の砂粒と5%大の小礫をわずかに混入 5~10%大の鉄分凝縮ブロック25%しまり有り 2~4層軽石混入 4', 10YR 5% 明褐色4層より砂が多い他は同じ 5, 10YR 5% に近い黄褐色シルト質主体2~4層にくらべ砂が少なく礫がない。しまり有り 5', 10YR 5% に近い黄褐色5層より砂が少ない他は同じ 6, 10YR 5% 黑褐色1, 2, 3, 4, 層の混土層。2~4層が50%しまり弱い。

図13 小トレンチ3地層図

#### 4 トレンチ



写真12 4 トレンチ東 (南から)



写真13 4 トレンチ西 (南から)

4 トレンチは3 トレンチの南の水路予定部分である。土坑2、性格不明遺構2の他、鉄分凝縮地点2を検出した。

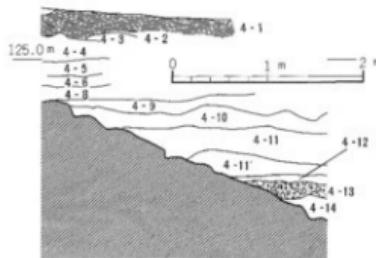


図14 4 トレンチ土層図

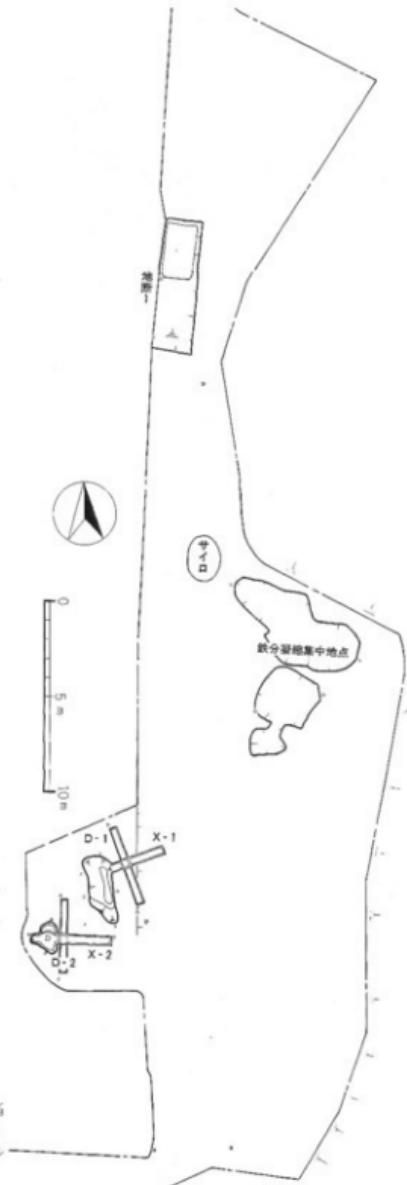


図15 4 トレンチ平面図

## 土坑 1 及び性格不明遺構 1



トレンチ西から検出。土坑は360×120cm、深さ120cmのだ円形で性格不明遺構側の東側が直立し、西側はややなだらかである。性格不明遺構は黄、褐色土が地表に露出して見え、掘り方も推定できたが、性格は確定できなかった。

(左) 写真14 遺構全体

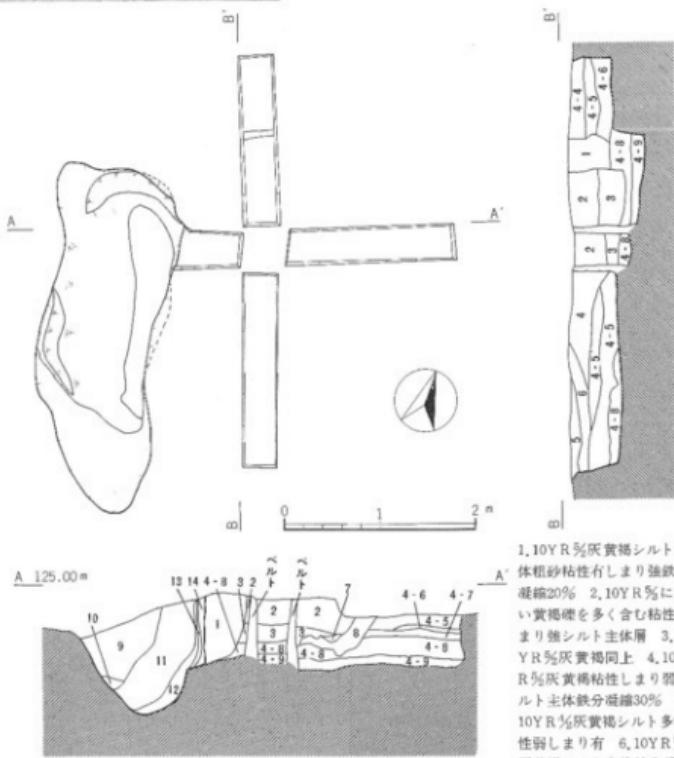


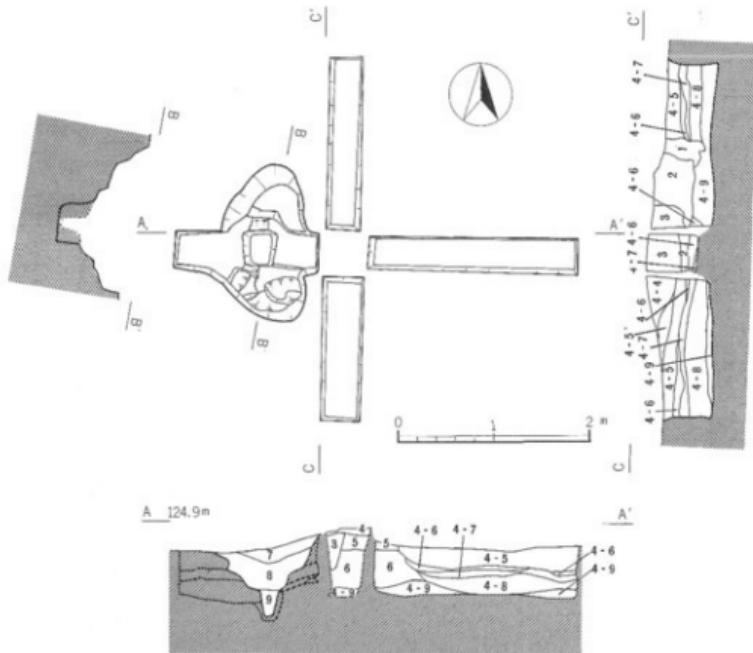
図16 土坑 1 及び性格不明遺構

## 土坑 2 及び性格不明遺構 2



写真15 遺構全体

トレンチ西で土坑 1 の南西から検出。土坑は  $160 \times 90\text{cm}$ 、深さ  $80\text{cm}$  の円形である。性格不明遺構側の東は直に立ち、西側はややなだらかである。底が  $30\text{cm}$  ほどの深さのピットになっていた。性格不明遺構は、他と同じく黄褐色土が地表に露出していた。掘り方も推定できたが、地山が上にかぶっているなど、不自然な点もあり、性格は確定できなかった。



1.10YR<sup>5%</sup> 黒褐色粗砂しまり有擾乱部分  
2.10YR<sup>5%</sup> 灰黃褐色粘性しまり有砂及び鉄分纖維10%を含む  
3.10YR<sup>5%</sup> に  
4.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色弱しまり有細砂 4-4 層に近い  
5.10YR<sup>5%</sup> に  
6.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色弱しまり有砂粒  
7.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色弱しまり有  
8.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色弱しまり有砂と礫を含む  
9.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色 3 層土混入しまり強  
10.10YR<sup>5%</sup> 黑褐色 4-8 9 層のシルトを混入粘性弱しまり有

図17 土坑 2 及び性格不明遺構

## C トレンチ



写真16 C トレンチ全体 (西から)

土坑覆土は、黒褐色系の粘性土で、しまりがあるが、土坑2の方が砂質である。

性格不明遺構は、C-8層を主体にした黄褐色土であるが、掘り方は検出されず、逆に自然堆積のC-8層とつながっている。

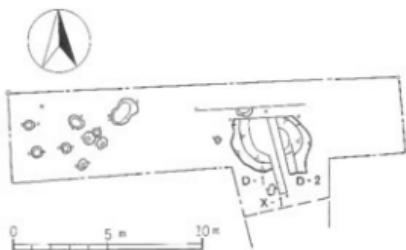


図18 C トレンチ平面図

遺跡西を東西に通る道路予定部分のトレンチである。民家、植木のため東側が調査できなかった。

ほぼ中央に黄褐色土が露出し、その両側に黒褐色土の土坑が検出された。

土坑1はほぼ450×200cm、深さ80cmほど、土坑2は、300×150cm、深さ40cmほどの大きさである。

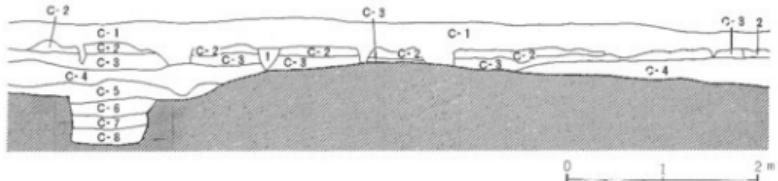
土坑1、2とも中央の性格不明遺構側が傾斜が急になり反対側がややなだらかになっている。

ちょうど土が盛り上がった形であることもあり、性格は確定できない。

トレンチ西側には、ピットが10、土坑近くにピットを2検出した。

いずれも小規模で浅く、覆土も黒褐色系の土で、木の根のあとと見られるものである。

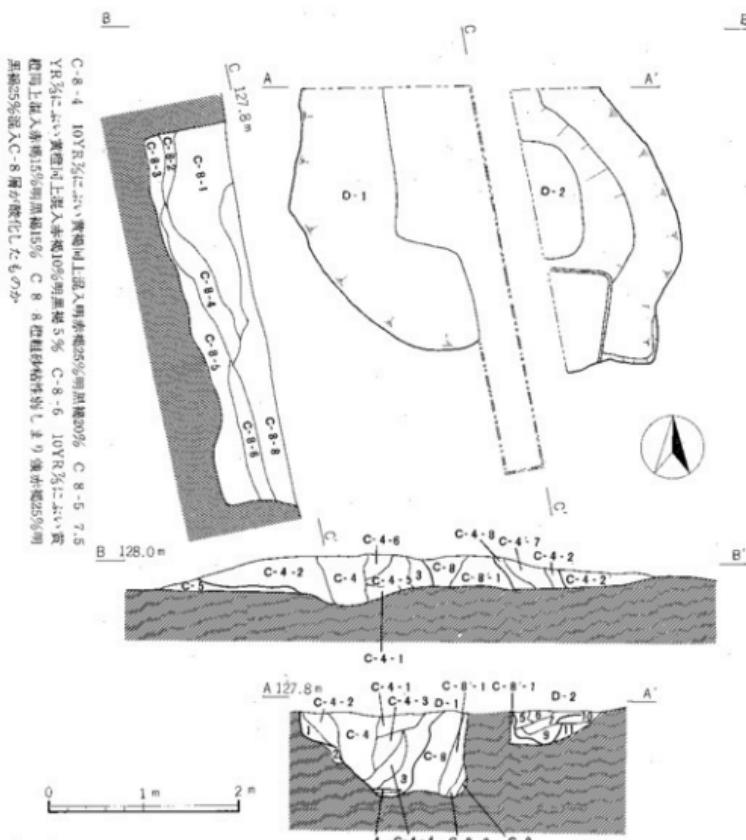
遺構検出面はC-6層で、西端で地表面から40cm、東端で50cmほどになっている。



C-1.10YR%黒褐粗砂耕作土 C-2.10YR%黒褐C軽石多い粘性無しまり有 C-3.10YR%黒褐細砂たて横に帯状茶褐色土3%粘性弱混入なししまり有 C-4.10YR%黒褐細砂しまり有粘性弱鉄分凝縮ブロック7% C-5.10YR%に近い黄褐色鉄分凝縮3%細砂しまり有 C-6.7.5YR%黒褐粘性しまり有鉄分凝縮5% C-7.7.5YR%灰白1%前後の砂多い粘性しまり有 C-8.10YR%に近い黄褐色粘性しまり強 1.10YR%黒褐C-1.2.3の混土 2.10YR%黒褐C 1.2の混土

図19 C トレンチ土層図

## 土坑1、2及び性格不明遺構1



1.10YR%黒褐色粘性弱しまり有褐色土15% 2.7.5YR%黄褐色粘性弱しまり有 3.7.5YR%暗褐色弱しまり  
粘性強地山とC-7層が20%ずつ混入 4.10YR%黄褐色粘性弱しまり強 5.10YR%に由い黄褐色砂に  
微細砂粘性弱しまり強い 6.7.5YR%に由い黄褐色砂粘性弱しまり有黑褐色土15% 7.7.5YR%黒褐色砂  
粘性弱しまり有赤褐色土灰褐色土褐色土10%ずつ混入 8.10YR%黄褐色砂粘性弱しまり有 9.10YR%黄褐色  
砂粘性弱しまり有赤褐色土山に近い C-4-1 5YR%黒褐色粘性弱しまり有褐色土5% C-4-2 2.5YR%黒褐色  
粘性弱しまり有赤褐色土5% C-4-3 10YR%黒褐色粘性弱しまり有褐色土10% C-4-4 10YR%黒褐色同上混入20%  
5.7.5YR%黒褐色混入なし同上 C-4-6 7.5YR%同上黄褐色土混入 C-4-7 7.5YR%黒褐色  
上混入30% C-4-8 C-4-7層とC-8-1層の混土 C-8-1 10YR%灰褐色粘性弱しまり有赤褐色25%  
C-8-2 2.10YR%明黄褐色同上混入30% C-8-3 10YR%に由い黄褐色粘性弱しまり強下部は砂質

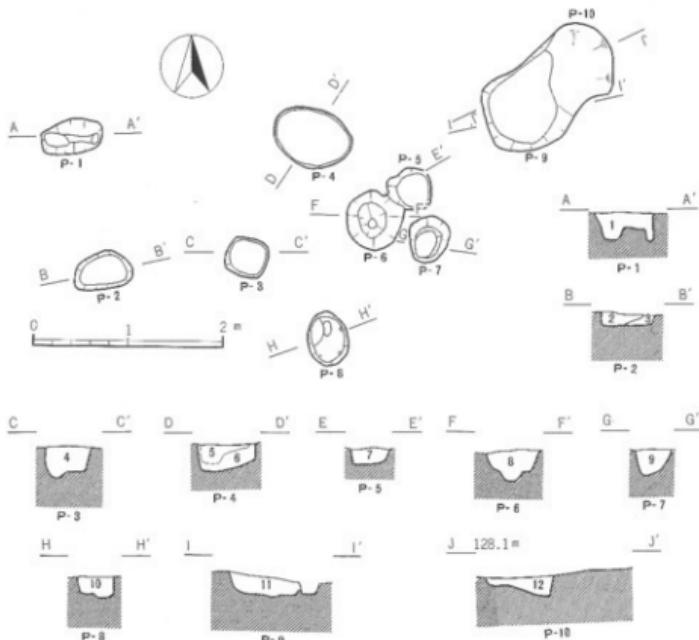
図20 土坑1、2及び性格不明遺構



写真17 遺構全体



写真18 土坑1全体



1.7.5YR<sup>5%</sup> 黒粗砂粘性しまり有 2.7.5YR<sup>1-7%</sup> 黒細砂粘性有褐色の粘土20%混入 3.10YR<sup>3%</sup> 黒褐細砂しまり有地山部分 4.7.5YR<sup>3%</sup> 黒粗砂しまり有褐色土30%混入 5.7.5YR<sup>1-7%</sup> 黒粗砂しまり有赤褐色土20%混入 6.10YR<sup>3%</sup> 黒褐細砂しまり有地山部分 7.2.5YR<sup>3%</sup> 黒褐細砂粘性しまり有 8.7層に赤褐色土3%混入 9.8 層下部に褐色土混入 10.2.5YR<sup>5%</sup> 黒しまり強 11.5YR<sup>5%</sup> オリーブ黑色粗砂粘性有しまり強 12.2.5YR<sup>3%</sup> 黒褐粗砂粘性しまり有

図21 Pit群

## 5 トレンチ



写真19 5 トレンチ (北)



写真20 5 トレンチ (南)

5 トレンチは、遺跡西端の南北に通る道路予定部を掘り下げたものである。現状で使用している道路があり北と南に分かれた他、トレンチ北も道路予定幅を掘ることができなかつた。

トレンチ北はC トレンチ西にあり、北端にピット 7 基と土坑 3 基、性格不明遺構 3 を検出している。

遺構検出面はC トレンチよりも深く、90cmほどある。土層では5—27層黄褐色土である。

5 トレンチ南からは、土坑 5 基、ピット 6 基、井戸 1 基、集石遺構 1 、性格不明遺構 2 、鉄分凝縮 3 地点を検出している。

遺構検出面は5—7層黄褐色土であるが、トレンチ (南) 北端で表土から50cmほど、南端で90cmほどになっており、南へ自然傾斜している。

南端の土層にはC 鉱石純層が検出されたが、その下に遺構は確認されなかつた。

4 トレ、5 トレから検出された鉄分凝縮は、当初鉱滓ではないかと考え、その分布状況、周辺の遺構確認、堆積状態を調査した。

その結果、薄い層の重なりとして堆積しており、一度に集められたものではないこと。酸化鉄の間に多量の土が入りこんでいること、地層の間に入りこんだ形で堆積し、掘り方が検出できなかつたことがわかつた。東京工業大学製鉄研究会の所見でも、鉱滓ではなく、地中の鉄分が集積し、酸化凝縮したものであるとの結果が出、製鉄に伴う遺構ではないと結論づけた。

昨年度調査地区の大明神遺跡内から続く河川跡の地層内からも、多量の鉄分凝縮層が、あたかも鐵板のようになって出土したことを考えあわせると、この付近の土層には、砂鉄が多量に含まれていることが推定される。

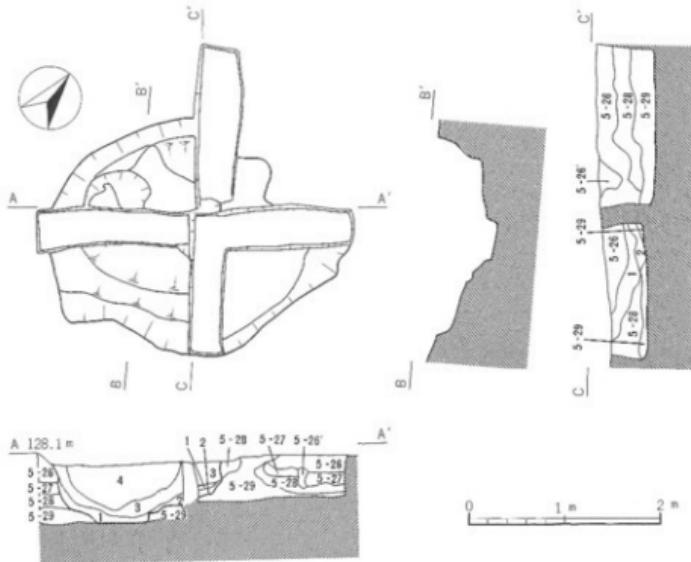
現状では、桑畠として、水田面より微高地となっているところであるが、4 トレンチの深掘りから考えても、洪水等で、水が流れることが多い地帯であったとも推定される。

## 土坑 1 及び性格不明遺構 1



写真21 遺構全体

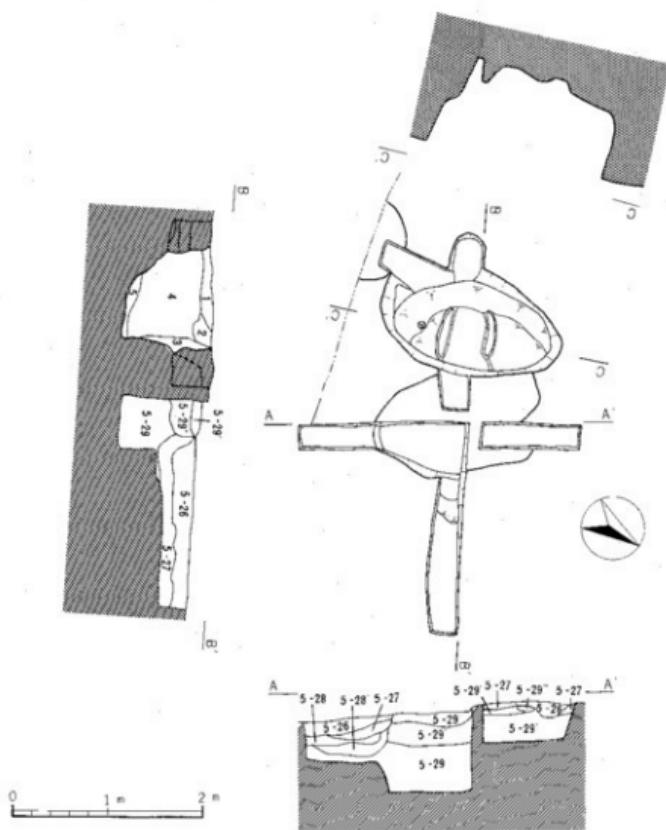
トレンチ北に検出された土坑で、 $240 \times 120\text{cm}$ 、深さ $60\text{cm}$ ほどである。性格不明遺構側の北は、傾斜が急で、反対側はややなだらかである。覆土は黒褐色土、性格不明遺構は、5—29層を中心とするが、自然堆積層から続いている形であり、盛り上がりがある様子など、他の性格不明遺構と同じく不明な点が多い。



- 1. 10YR 5% 單褐色 細砂粘性なし、しまり有 5-28層ブロック ( $2 \sim 5\text{cm}$ 大) を 5%混入
- 2. 10YR 5% 灰黄褐色 細砂粘性弱い、しまり有
- 3. 2.5Y 5% 單灰黄色 細砂粘性弱い、しまり有 1cm大の鉄分凝縮ブロック 3%混入、5-26層に近い
- 4. 10YR 5% 黒褐色 細砂しまり有粘性なし

図22 土坑 1 及び性格不明遺構 1

土坑 2 及び性格不明遺構 2



1. 2.5 Y3/6 暗オリーブ褐色 5-26層とはほぼ同じだが鉄分凝縮ブロックを含まない
2. 10YR4/6 に近い黄橙 細砂粘性弱しまり有5-27層の褐色粒を多量に含む
3. 10YR4/6 黄色 細砂粘性弱しまり有5-27層の褐色粒を含む
4. 10YR4/6 黒褐色 細砂しまり有粘性弱
5. 10YR4/6 墓掲色 細砂しまり有粘性弱5-9層ブロック（3-5cm大）を3%混入

図23 土坑 2 及び性格不明遺構 2

### 土坑3 及び性格不明遺構3



写真22 遺構全体

トレンチ（北）中央で土坑1、2の南に検出された。土坑は160×100cm、深さ60cmほど。性格不明遺構側が、やや急になっている。覆土は黒褐色土主体である。

性格不明遺構は、1、2と同じく5—29層が主体となっており、盛り上がる形で検出されており、その性格は確定できなかった。

土坑、性格不明遺構2とは、重なり合うようにして検出された。

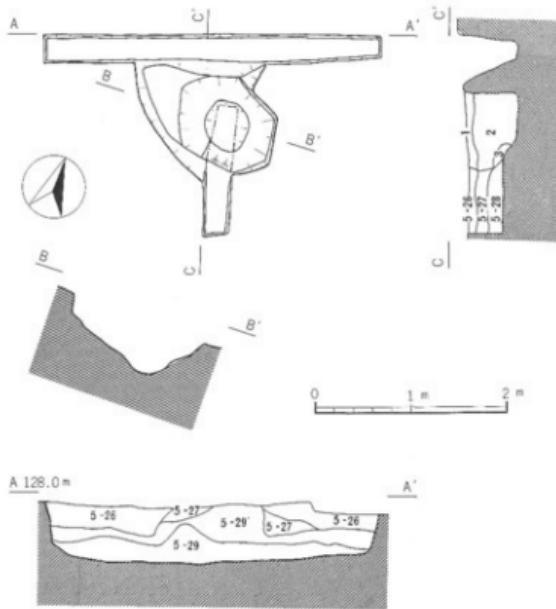


図24 土坑3 及び性格不明遺構3

## 土坑4 及び性格不明遺構4

トレンチ（南）に検出、380×200cm、深さ120cmほどで、性格不明遺構側は垂直に近い傾斜で、反対側はなだらかである。性格不明遺構は5—11層が主体で盛り上がる形になっている。

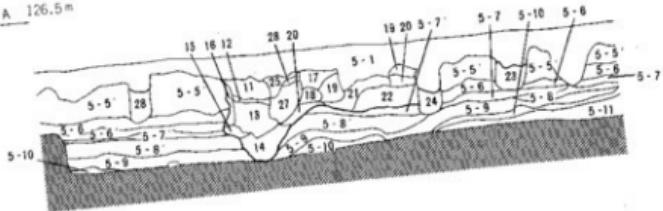
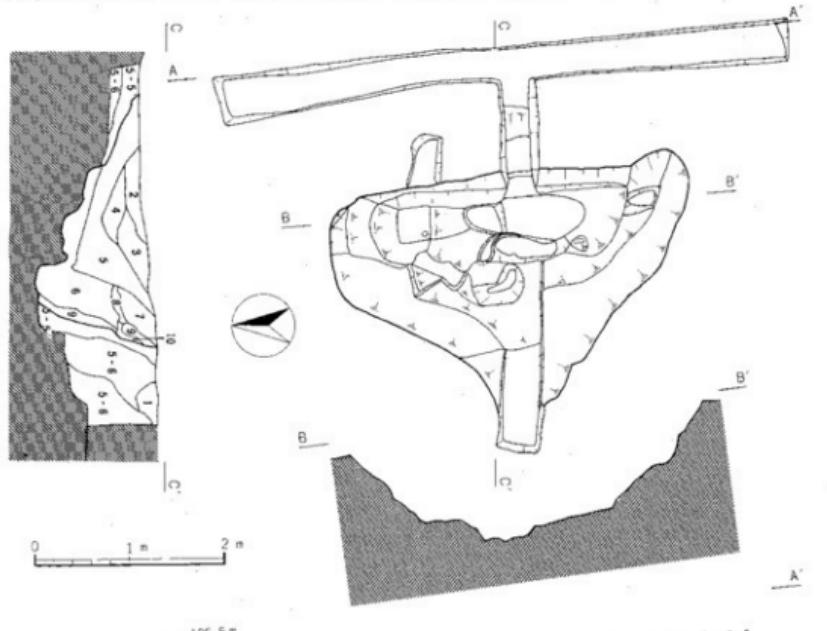


図25 土坑4 及び性格不明遺構4

### ピット群(5トレ(北)ピット1~7)

5トレ北端に検出されたピット群で、覆土は粗砂の黒色土でしまりの弱いものがほとんどである。形状や土層などから考えて、木の根のあとと考えられるものである。

深さも、平均20cmほどであった。

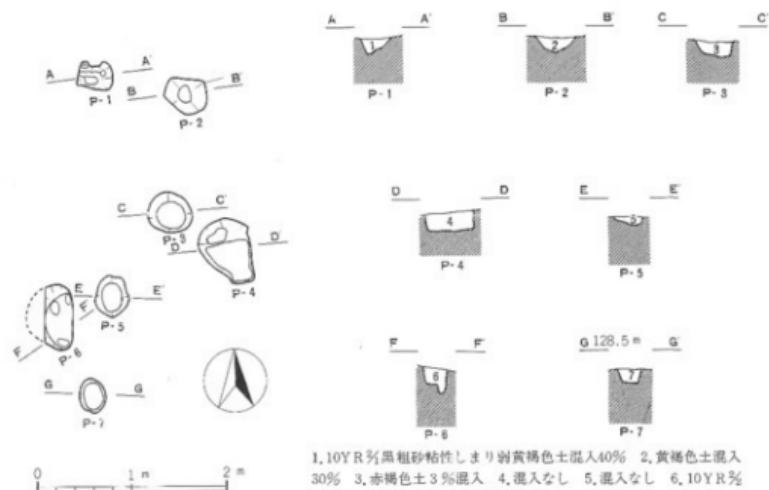


図26 5トレ(北)P1~P7

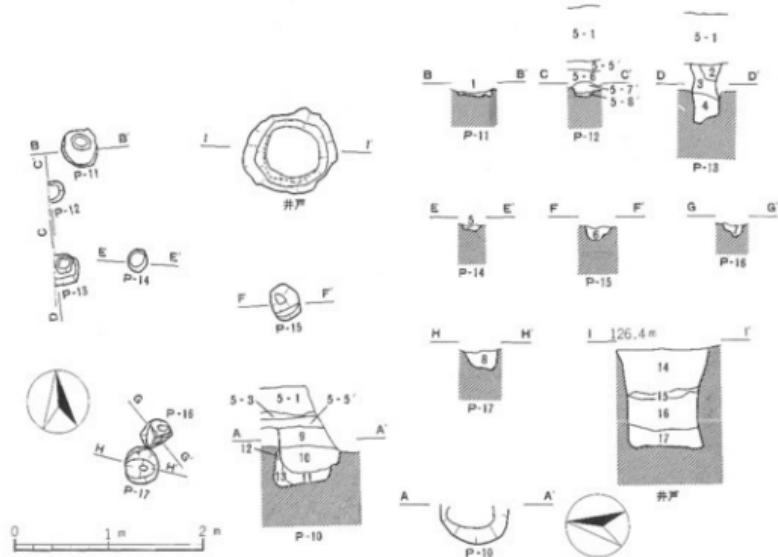
### ピット群(5トレ南、ピット10~17)及び井戸



写真23 遺構全体

5トレ南の中央にまとまって検出された。

ピット13を除いては、P1~7と同じ性格のものと思われる。ピット13には、Bと思われる軽石が見られ、深さも地盤から見て60cmあった。井戸は上端で径100cmほど、深さ100cmほどで完掘したが、地下水位が作られた当時より下がつており、水は噴出しなかった。井戸に伴う設備についても調査したが、遺構は確認できなかつた。



1,10YR%黒褐試質褐色土ブロック3%粘性無 2,7.5YR%黒褐浅黄褐色土ブロック5%粘性無 3,10YR%黒褐棕色土ブロック5% 4,10YR%黒Bスコリア多量に混入 5,10YR%黒褐 6,10YR%黒橙色土ブロック5% 7,10YR%黒褐黄褐色土ブロック7%粘性無 8,10YR%黒褐色土ブロック3% 9,10YR%黒褐粘性無 10,10YR%黒9層に同じ 11,10YR%黒粘性強 12,7.5YR%褐5-7'層の風化粘性強 13,10YR%黒褐黃褐色土ブロック10%粘性強 14,10YR%10黒褐ニツ岳系の鰐石多 15,2.5Y%黒褐細砂 16,10YR%黒褐鰐石多 17,10YR%黒褐5-6層土ブロック10%16層に同じ

図27 P10～P17及び井戸

### 土坑及び集石遺構



写真24 遺構全体（北から）

トレント（南）ほぼ中央から検出された。土坑と集石遺構の関係は、性格不明遺構の場合と同じで、盛り上がっている土層の中心は5—11層であるが掘り方が検出されている他、各層にまんべんなく小礫（4~10mm大）が含まれている点に違いがある。

トレントの他では礫の散布ではなく、きわだつていて、土坑は黒褐、暗褐の土が中心で、集石遺構側の傾斜が急になっている点は、他の土坑と同じ。

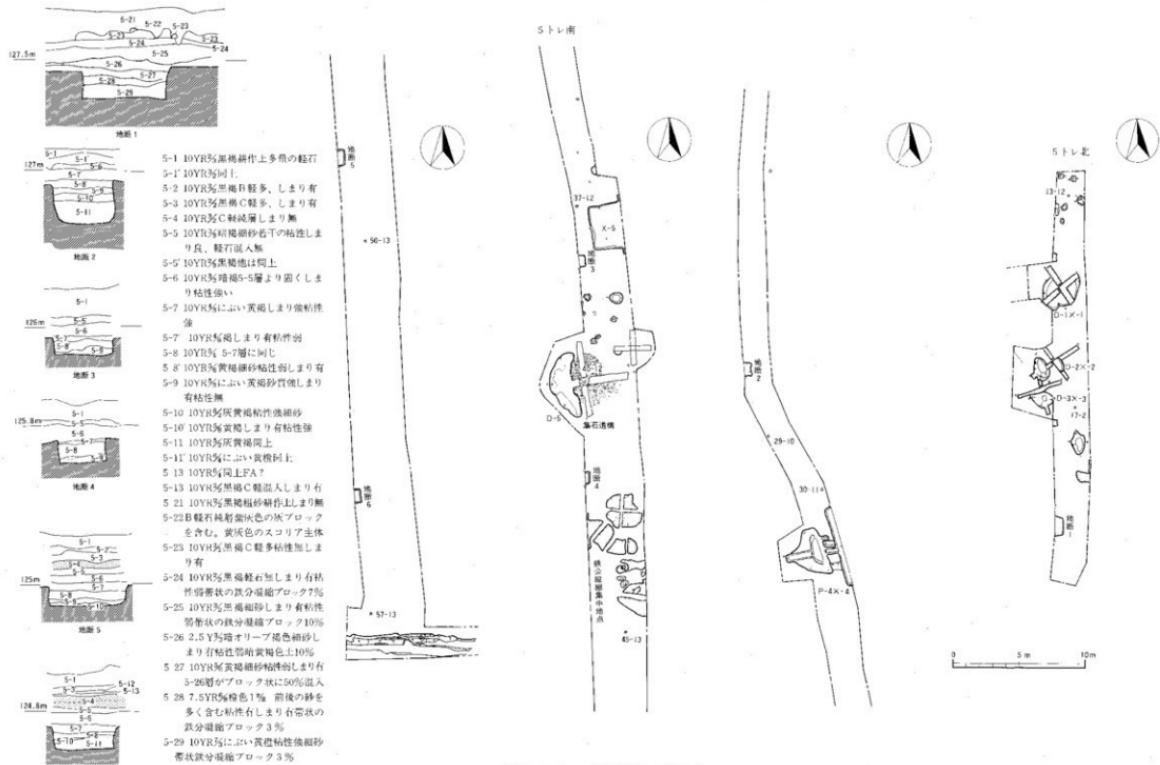
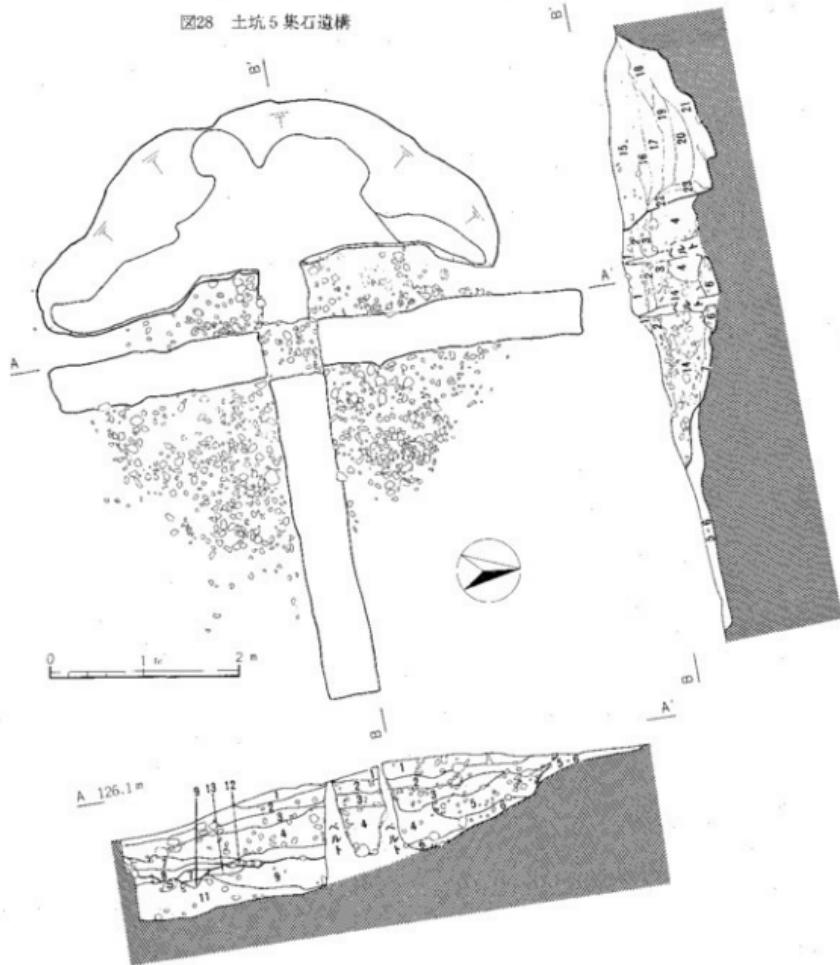


図29 5トレーン平面図及び土層図

図28 土坑5集石遺構



1.10YR%灰5-5'か5-6層に近い  
2.10YR%端幅1層から3層の漸移層  
3.10YR%に近い黄褐色、1cm大黄褐色土ブロック50%  
4.10YR%明褐色5-6層と同じ  
5.10YR%3層に同じ  
6.10YR%5-2.3層と同じ砂質でしまり弱い  
7.10YR%灰黄褐色砂結石有しまり有  
8.5-6層と5-8'層の混上層  
9.5-6層と同じ塊を含む  
10.5-6層に近く黄褐色土ブロック10%  
11.2.5YR%黄褐色砂礫層  
12.7層と同じ塊が多い  
13.10YR%灰黄褐色5-6層に近いやや黄色が強い  
14.10YR%砂結石しまり有黄褐色土  
ブロック15%  
15.7.5YR%漂白層  
16.10YR%灰  
17.5YR%漂白層  
18.10YR%灰  
19.10YR%灰  
20.10YR%  
21.10YR%灰  
22.10YR%に近い黄褐色しまり強粘性無4層粒多い鉄分凝縮5%  
23.10YR%漂白層  
24.10YR%に近い黄褐色しまり有粘性有鉄分凝縮15% 4層粒多い

## D トレンチ



写真25 D トレンチ全体

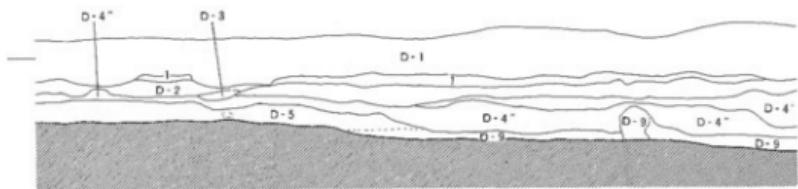
遺跡南西の東西に通る道路予定部分を掘ったもの。

すぐ南は現状で使用している道路であり、北のみを掘り下げた。西端から溝、中央から土坑1と性格不明遺構を検出した。

トレンチ中央は大きく窪んでおり、当初は南北に通る溝を想定したが、地層の様子から、自然の落ちこみと判断した。



図30 D トレンチ平面図



1.10YR%暗褐やや砂質 D-1.10YR%黒褐耕作土多量の軽石含む D-2.10YR%黒褐C軽石多い D-3.10YR%黒褐C軽石純層底地のみ D-4.10YR%黒褐D-5.10YR%黒褐細砂しまり有 D-6.7.5YR%黒褐色シルト主体しまり有粘性有 D-7.10YR%灰黄褐色シルト主体礫2%しまり有粘性有 D-8(D-7の下)10YR%灰黄褐色分離前ブロック50%他はD-7と同じ D-9.10YR%灰黄褐色シルト主体層粘性強くしまり有 D-4'10YR%黒褐色軽石少量混入しまり有 D-4'10YR%黒褐色有やや凹くしまる D-4'10YR%灰黄褐色やや粘性をもち固くしまる シルト性をもつ D-9'10YR%灰黄褐色基本的にD-9層と同じだが、やや汚れが目立つ D-7.8層は所により3~5cmの縦を15%混入している

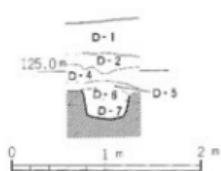


図31 D トレンチ土層図

## 溝 1

トレーナー西端を北西から南東の方向に通っていた。地断から見ると、耕作土の下の土から掘りこまれており、比較的新しい溝である。覆土中にC軽石が含まれている。岸に窪みが1ヶ所あり、近世のものとみられる陶器が出土している。

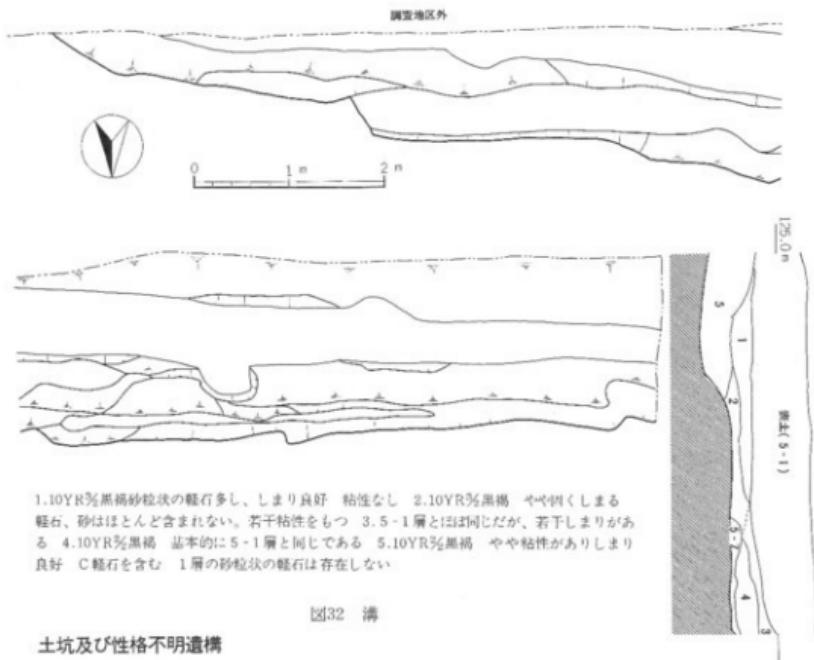


図32 溝  
土坑及び性格不明遺構

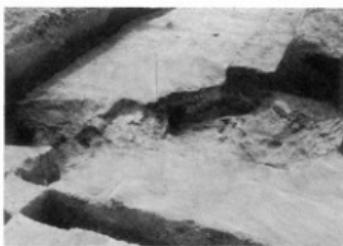


写真26 遺構全体

トレーナー中央に検出された。土坑は480×180ほど、深さ40cmほどの細長い円形。他の土坑と同じく、性格不明遺構側は傾斜が急になっている。

覆土は疊を含んだ黒褐色土が中心である。

性格不明遺構は、D-6層が中心であり、同じく盛り上がる形で検出されているが、自然堆積の中に入りこんだり、おおわれたりしており、性格は不明である。

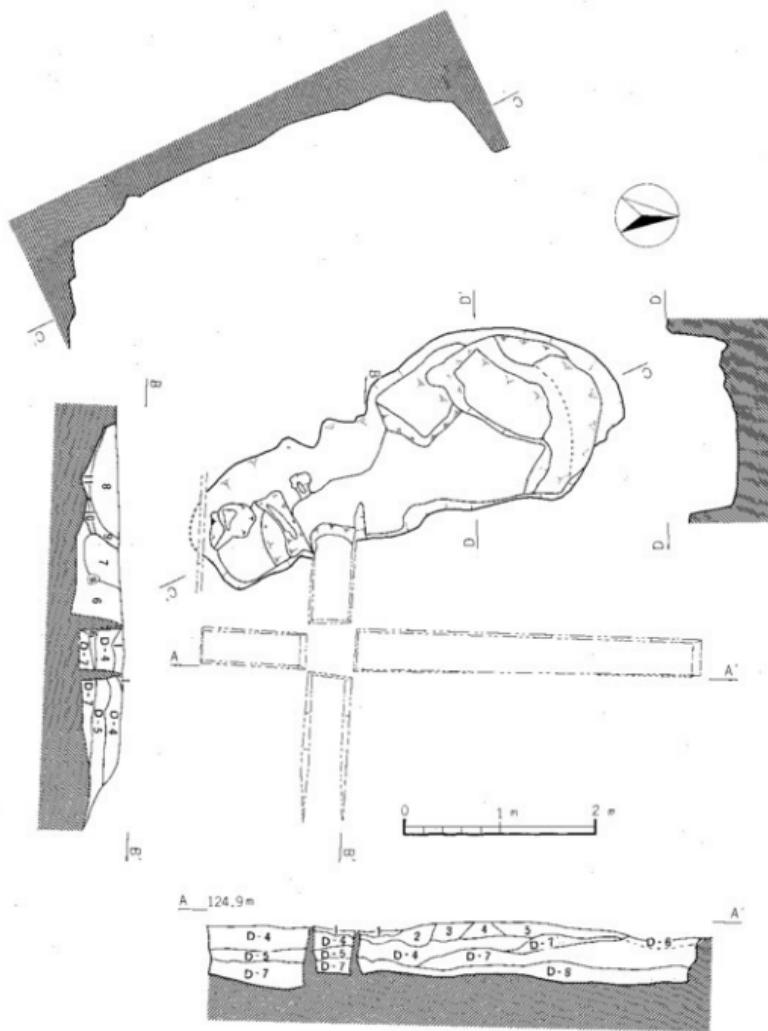


図33 Dトレンチ土坑1及び性格不明遺構1

## VII まとめ

### 遺跡の位置について

遺跡地は、中央を川が流れ、東に水田、西に桑畠という土地であり、桑畠には遺物の少量散布があった。水田には、昨年度の大明神遺跡で検出された河川跡が続いて検出されることが予想できたが、遺物の散布は見られなかったため住居跡の存在はほとんどないと予想した。尚1トレンチ東の桑畠には遺物が濃密に散布していた。

西の桑畠は、現状から見て南傾斜の微高地で、遺物の散布から見ても、遺構の存在を予想したが、土層と地形の項でも述べたように、現地形が適地のように見えても、昔はそうでなかったことがわかった。

尚、2トレンチで検出された遺物の出土から考えて、この北に縄文から古墳時代にかけての住居跡があることが予想されるにとどまった。

中央の河川についても、人工のものという言い伝えはあったが、事業地内の調査では、人工のものであるという確認はとれなかった。

### 遺構について

本遺跡内の遺構は、土坑と井戸を中心であり、住居跡は検出されなかった。河川跡は、昨年のものが続いて検出され、FA層も確認できた。この1号河川と重なって2号河川が検出でき、なおかつ、1号より古いことが確認できた。

土坑は、すべて、性格不明遺構と組み合った形で検出され、何らかの関係を考えざるを得ない。すべて、性格不明遺構側が急傾斜になり、反対側がなだらかであるだ円に近い形をしている。

土坑が西、性格不明遺構が東という形が基本になっており、その意味でも何かの意味を考えざるを得ないように思う。

性格不明遺構は、当初、地山が何らかの理由で持ち上げられたものかとも考えたが、トレンチを入れて調べた結果、地山が続いており、小山状に残っていたところに土砂が堆積されたものを見るのが自然であると思われる。

集石遺構も、疊が多く集中して混入していることを除けば、基本的には性格不明遺構と同じであるが、なぜ、ここに石が集まつたか、人為的なものであるかどうかは、確認できなかった。

井戸は、使用当時より、地下水位が下がっているが、この原因としては、中央の谷とよばれる河川の影響ではないかと思われる。

ピットについては、柱穴と考えられるものは、全くなかった。

## 出土遺物について

本遺跡からは遺構に結びつく遺物は出土していない。

2トレンチ中央を南北に通る1号2号河川跡から113点の遺物が出土したものがすべてであり、數十点の表探遺物には、実測に耐え得るものはなかった。

1号河川からは、石田川期、鬼高Ⅰ期の土師器と石片が出土している。鬼高Ⅰ期の壺、石田川期の壺、塊が確認され、壺の胴部外側に赤色塗彩したものが3点出土している。また黒色塗彩も出土している。出土位置は川底あるいは川底のビットであり、周辺か上流から流されたものと推定される。

2号河川からは、8点出土している。縄文式土器の破片の他完形の石鎌、石斧が出土している。縄文式土器は諸磯B式のものと見られ、同時期の住居跡が周囲にあることがわかる。遺跡の北昨年度調査地区の倉本、九料遺跡や芳賀西部工業団地遺跡から、縄文時代前期の遺構が見つかっており、その点からもうなづけるものである。

なお、2トレンチからは、第二次世界大戦末期に、米軍によって投下された焼夷弾が3個体分発見された。当地にあった部品工場あるいは、松根油工場をねらったものといわれ、公民館東から遺跡地西まで一列に落とされ、数軒の家と寺院一字を焼失させたとのことであった。これも歴史上の遺物というべきものであろうか。

## まとめとして

本遺跡地は、遺構の検出から遺跡と認定されたものであるが、土層と地形の項でも触れたように、本来的には、谷地形であり、その上に水成堆積があり、河川の開削により、赤城南面に多い舌状台地であるように見られたものである。

遺物の散布が少量であることから、遺構の検出は少ないと予想はできたが、結果的には住居跡の検出ではなく人の生活に結びつく遺構といえるものは、井戸1基だけである。

土坑と性格不明遺構についても、担当者に乏しい知識では、その性格を明らかにすることはできなかった。

・河川跡から検出された遺物から、北あるいは近くに遺構の存在が予想されたが、北は、昭和60年度土地改良の予定地であり、その調査によって確認されるかもしれない。



写真27 作業員さんとの記念写真

小神明遺跡群III (59C-3)

## 谷向遺跡

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 前橋市教育委員会  
前橋市大手町二丁目12番1号

印刷 朝日印刷工業株式会社  
前橋市元総社町寺田67番地











